

橫光利一集

32

現代文學大系



橫
光
利
一
集

現代文学大系 32



筑摩書房

現代文学大系 **32** 横光利一集

昭和四十一年十一月二十五日第一刷発行

著 者 横光利一

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装 幀 真博鍋

本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙クロス 東洋クロス株式会社
本文整版 株式会社精興社
本文印刷 株式会社精興社
製本 和田製本工業株式会社

横光利一集 目次

上海

五

紋章

一六

日輪

二四

蠅

三二

静かなる羅列

三六

ナポレオンと田虫

三七

春は馬車に乗つて

三八

花園の思想

三九

機械

四〇

時 間
榛 名
秋

年 譜

人と文学

河上徹太郎

四七

四〇

四四

三六

三三

橫
光
利
一
集

古里
と

遠
さかした

水
なる

横
光

上海

一

満潮になると河は膨^{はふ}れて逆流した。測候所のシグナルが平和な風速を示して塔の上へ昇つていつた。海関の尖塔が夜霧の中で煙り始めた。突堤に積み上げられた樽の上で、苦力達が湿つて来た。鈍重な波のまにまに、破れた黒い帆が傾いてぎしぎし動き出した。白皙^{はくせき}明敏な中古代の勇士のやうな顔をしてゐる参木は、街を廻つてバンドまで帰つて来た。波打際のベンチにはロシア人の疲れた春婦達が並んでゐた。彼女らの黙々とした瞳^{ひとみ}の前で、潮に逆らつた船舶の青いランプがはてしなく廻つてゐる。

「あんた、急ぐの。」

春婦の一人が首を参木の方へ振り向けて英語で訊ねた。彼は女の二重になつた顎^{あご}の皺^{しわ}に白い斑点のあるのを見た。

「空いてゐるのよ、ここは。」

参木は女と並んで坐つたまま黙つてゐた。灯を消して蜩^{せみ}集^{あひ}してゐるモーターボートの首を連ねて、鎖^{くさり}で縛^{くわ}られた棧^{いし}橋^{はし}の黒い足が並んでゐた。

「煙草。」と女は云つた。

参木は煙草を出した。

「毎晩ここかい。」

「ええ。」

「もうお金もないと見えるな。」

「お金もないし、お国もないわ。」

「それや、困つたの。」

霧が帆柁^{はだて}にからまりながら湯気のやうに流れて来た。女は煙草に火を点けた。石垣に縛^{くわ}られた船が波に揺れる度毎に、船名のローマ字を瓦斯燈^{ガスとう}の光りに代る代る浮き上らせた。樽の上で賭博してゐる中国人の首の中から、鈍い銅貨の音が聞えて来た。

「あんた、行かない。」

「今夜は駄目だよ。」

「つまないわ。」

女は足を組み合はした。遠くの橋の上を馬車が一台通つて行つた。参木は時計を出して見た。甲谷の来るのはもう直ぐだつた。彼は甲谷に宮子と云ふ踊子を一人紹介される筈になつてゐた。甲谷はシンガポールの材木の中から、此の濁つた底知れぬ虚無の街の上海^{シヤanghai}に妻を娶^{めと}りに来たのである。濡^ぬれた菩提樹^{ぼだいじゆ}の隙間から、縞^{しま}を作つた瓦斯燈^{ガスとう}の光りが、春婦達の皺^{しわ}のよつた靴先へ流れてゐた。すると、その縞^{しま}の中で、ひと流れの霧が急がしさうに朦朧^{もうろう}と動き始めた。

「帰らうか。」と一人の女がいつた。

春婦達は立ち上ると鉄柵に添つてぞろぞろ歩いた。一番後になつた若い女が、青ざめた眼でちらりと参木の方を振り返つた。すると、参木は煙草を銜へたまま、突然夢のやうな悲しさに襲はれた。競子が彼に別れを告げたとき、彼女のやうに彼を見降ろして行つて了つたからである。

春婦達は船を繋いだ黒い縄を跨ぎながら、櫓の間へ消えてしまつた。後には踏み潰されたバナナの皮が、濡れた羽毛と一緒に残つてゐた。突堤の先端に立つてゐる警邏の塔の入口から、長靴を履いた二本の足が突き出てゐた。参木は一人になるとベンチに凭れながら古里の母のことを考へた。その苦勞を続けてなほますます優しい手紙を書いて来る母のことを。——彼はもう十年日本へ歸つたことがない。

その間、彼は銀行の格子の中で、専務の食つた預金の穴をペン先で縫はされてゐただけだつた。彼は、忍耐とは、此の生活の上で他人の不正を正しく見せ続ける努力にすぎぬと云ふことを知り始めた。さうして、彼はそれが馬鹿げたことだと思ふ以上に、いつの間にかだんだんと死の魅力に牽かれていつた。彼は一日に一度、冗談にせよ、必ず死の方法を考へた。それが最早や彼の生活の唯一の整理法であるかのやうに。彼は甲谷を擱まへて酒を飲むといつも云ふのだ。

——お前は百万円擱んだとき、成功したと思ふだらう。ところが俺は、首を縄で縛つて、踏台を足で蹴りつけたとき、やつたぞと思ふんだ。——

彼は絶えずその真似だけはやつて来た。しかし、彼の母が頭の中に浮び上るとまたその次の日も朝からズボンに足を突き込んで歩いてゐた。

——俺の生きてゐるのは、孝行なのだ。俺の身体は親の身体だ、親の。俺は何んにも知るものか。——

参木に許されてゐることは、事実、ただ時々古めかしい幼児のことを追想して涙を流すことだけだつた。彼は泣くときに思ふのである。

——えーい、ひとつ、ここらあたりで泣いてやれ。——それから、彼はポケットへ両手を突き込んで各国人の自棄な馬鹿騒ぎを、祭りを見るやうに見に行くのだ。

しかし、甲谷がシンガポールから来てからは、参木は久し振りに元氣になつた。甲谷と彼とは小学校時代からの友達だつた。参木は甲谷の妹の競子を深く愛してゐた。しかし、甲谷がそれを知つたのは、競子が人妻になつて後だつた。甲谷は云つた。

「馬鹿だね、君は。何ぜ俺に一言それを云はなかつたのだ。云つたら、俺は。」

云つたら甲谷は困るにちがひないと、参木は思つて黙つてゐた。そして、今までひとりひそかに困つてゐたのは参木である。だが、彼は今は一切のことをあきらめて了つてゐる。——生活の騒ぎのことも、彼女のことも、日本のことも。ただ時々彼は海外から眺めてゐると、日本の着々として進歩する波動を身感じて喜ぶことがあるだけだつた。

しかし、彼は最近、甲谷から競子の良人が肺病で死にかかつてゐると云ふ消息を聞かされてからは、身体から釘が一本抜けたやうな自由さが感じられて来たのである。

二

崩れかけた煉瓦の街。其の狭い通りには、黒い着物を袖長に着た中国人の群れが、海底の昆布のやうにぞろり満ちて淀んでゐた。乞食等は小石を敷きつめた道の上に蹲つてゐた。彼等の頭の上の店頭には、魚の気胞や、血の滴つた鰓の胴切りが下つてゐる。そのまた横の果物屋には、マンガヤバナナが盛り上つたまま、舗道の上まで溢れてゐた。

果物屋の横には豚屋がある。皮を剥かれた無数の豚は、爪を垂れ下げたまま、肉色の洞穴を造つてうす暗く窪んでゐる。そのぎつしり詰つた豚の壁の奥底からは、一点の白い時計の台盤だけが、眼のやうに光つてゐた。

此の豚屋と果物屋との間から、トルコ風呂の看板のかかつた家の入口までは、歪んだ煉瓦の柱に支へられた深い露路が続いてゐる。参木と逢ふべき筈の甲谷はトルコ風呂の湯気の中で、蓄音器を聴きながら、お柳に彼の背中をマッサージさせてゐた。お柳は富豪の中国人の妾になりながら、此の浴場の店主を兼ねた。勿論、お柳は客の浴室へ出入すべき身ではない。だが、彼女の好みにあつた客を選ぶためには、番号のついたその幾つもの浴室を遊ばせておくことは不経済には相違ない。

お柳は客の浴室へ来るときは前からいつも、身体いつぱいに豊富な石鹼の泡を塗つてゐた。マッサージュがすむと、主人は客の身体に石鹼を塗り始めた。――間もなく二人の首が、真面目な白い泡の中から浮き上るとお柳は云つた。
「今夜はどちら。」

甲谷は参木と逢はねばならぬことを考へた。

「参木が突堤で待つてゐるのだが、もう幾時です。」

「さうね、でも、抛つといつて、あの方こちらへいらつしやるに違ひないわ。それよりあなた、いつ頃シンガポールへお帰りになるの。」

「それは分らないんですよ。僕は材木会社の外交部にゐるもんですから、こちらのフィリップピン材を蹴落してからでなくちゃ、と思つてゐるんです。」

「ぢや、もう奥さまはお探しになりましたの。」

「いや、それは、まアさう急いだことぢやなし、――何も女房のことなんか、今ごろ云はなくなつて、良いでせう。」

お柳の泡がいきなり甲谷の額に叩きつけられた。スイッチがひねられた。壁から吹き込む蒸気と一緒に蓄音器がベリーマインを歌ひ出した。それに合せて、甲谷は小さきミナステップを踏み始めた。すると、ゆつくり絞り出された石鹼の泡は、その中に包んだ肉体を清めながら、ぼたぼた白い花のやうに滴つた。やがて、蒸気が浴室に溢れ出すと、一面長方形の真白な霧の中に、主人も客も茫々として見えなくなつた。蒸気の中からお柳の声が聞えて来た。

「あなたに馬券分けようか。」

「もうプレミヤムがついてるんですか。」

「それや、つくさ。でも、負けてもいいわよ。」

「ああ、苦しい、一寸その蒸気、とめてくれないかな。」

「だつて、もういい加減に覚悟を定めるもんよ。ここちや誰だつて、一度は死ぬほど苦しくなるんだから。」

そのまゝ、二人の声は切れて了ふと、蒸気もぶつりとまつてしまつた。

三

参木は疲れたながらトルコ風呂まで帰つて来た。しかし、そのときはもう甲谷は参木に逢ひに突堤へ行つた後だつた。参木は応接間のソファーに沈み込んだまま黙つてゐた。浴場の奥から湯女達の笑ふ声と一緒に、ポルトギーズの猥雑の歌が聞えて来た。時々蒸気を抜く音が壁を震動させると、テーブルの上の真赤なチュールリッパが首を垂れたまま慄へてゐた。一人の湯女が彼の傍へ近寄つて来た。彼女は参木の横へ腰を降ろすと横目で彼の高く締つた鼻を眺めてゐた。

「眠いのかい。」と参木は訊ねた。

女は両手で顔を隠して俯向いた。

「風呂は空いてるのかね。」

女が黙つて頷くと参木は云つた。

「ぢや、ひとつ頼まう。」

参木は前から此の無口な女が好きであつた。彼女の名は

お杉と云ふ。お杉は参木が来ると、女たちの肩越しにいつも参木の顔をうつとり眺めてゐるのが常であつた。間もなく湯女達が狭い廊下いっぱいに水々しい空気をたてて乱れて来た。

「まア、参木さん、暫くね。」

参木はステッキの握りの上に顎を乗せたままじろりと女達を見廻した。

「あなたの顔は、いつ見てもつまんなさうね。」と、一人が云つた。

「それや、借金があるからさ。」

「だつて借金なんか、誰でもあるわ。」

「それぢや、風呂へでも入れて貰はう。」

女達はぱつと崩れて笑ひ出した。そこへお杉が浴室の準備を整へて戻つて来た。参木は浴室へ這入ると、寝椅子の上へ仰向けに長くなつた。皮膚が湯気に浸つて膨れて来た。彼はだんだんに眠くなると、ふと此のまま蒸気を出し放して眠つてみようと考えた。彼はスイッチをひねるとタオルを喰へて眼を瞑じた。身体が刻々に熱くなつた。もし此のまま死ぬたらとさう思ふと、競子の顔が浮んで来た。債鬼の周章でた顔がちらつた。残忍な専務の顔が。――専務の食つた預金の穴を知つてゐるのは彼だけだつた。間もなく銀行は停止を食ふにちがひない。格子の中から見た無数の顔が、暴風のやうに渦巻くだらう。だが、駄目だ。何もかも、人間の皺を製造するために出来てるのだ。――ドア

ーが開いた。誰でもいい。参木は眼を瞑つたまま動かなくつた。空気が幅広い圧力で動揺した。すると彼はいきなりタオルで眼かくしをされてゐた。お柳だ。お柳なら、皺を延ばすのが商売だ。――

「お杉さん。」と参木は故意にお杉の名前を云つてみた。

誰も彼には答へなかつた。参木はやがてお柳が自分にすり寄るであらう誘ひをお杉が自分にするものとして思ひたかつた。いや、それよりお柳に、自分がお杉と遊ぶ楽しみを知らせたかつた。彼はまだ一度もお柳の誘ひを赦したことがない。それ故お柳を怒らすことが、彼には彼女の感情をますます華やかに感じることが出来さうに思はれたのだ。彼は眼かくしをされたまま、にやにやしなうが、両手を拡げて身の廻りを探つてみた。

「おい、お杉さん、逃げようたつて逃さぬぞ。俺の手は蜘蛛みたいな手だから、用心してくれ。」

すると、彼の予想とは反対に、急にドアが開いて誰か出て行く気配がした。此の空虚な間に何事が起るのだらう。参木は暫くちつとしたまま、空気に触れる皮膚に意識を集めてゐた。と、突然、ドアの外で、荒々しい音がした。瞬間、彼の上へ突き飛ばされた女があつた。すると、女は彼の足元で泣き始めた。お杉だ。――参木は起つた事件の一切を了解した。彼はお柳に対して激しい怒りを感じて来た。だが、今怒り出しては、お杉が首になるのは分つてゐた。参木は自分でタオルを解くと、泣いてゐるお杉の乱れ

た髪を眺めてゐた。彼はお杉に黙つて浴室から出ると服を着た。それから、彼は別室へ這入つてお柳を呼んだ。お柳は笑ひながら這入つて来ると、白々しいとぼけた顔で彼に云つた。

「まア、随分今夜は遅かつたわね。」

「遅いは遅いが、しかし、さつきはどうしたんだ。」

「何が？」

「いや、あのお杉さ。」と参木は云つた。

「あの子は駄目よ。意気地が無くつて。」

「それで、僕にひつつけようて云ふんかい。」

「まア、さうしていただけれや、結構だわ。」

参木は自分の戯れが間もなく女一人の生活を奪ふのだと気がついた。彼がお杉を救ふためには、お柳に頭を下げねばならぬのだ。だが、彼がお柳に頭を下げたら。なほ彼女はお杉を抛り出すに定つてゐるのだ。それなら、自分はどうすれば良いのだらう。参木は寝台の上からお柳の片手を持つと抱き寄せるやうにして云つた。

「おい、お柳さん、俺がこんなことを云ふのは初めてだが、実は俺は、此の間から死ぬことばかり考へてゐてね。」

「どうしてそんなに死にたいの。」とお柳はひやかすやうに云つた。

「どうしてつて、まだ分らぬ柄でもないだらう。」

「だつて、あたしや、死ぬ人のことなんか分らないさ。」

「これほど情けを籠めてゐて、それにまださう云はれるや

うぢや、もう俺も死ぬことも出来ぬぢやないか。いい加減に何んとか、しかるべく云ひなさい。」

お柳は参木の肩を叩くと云つた。

「ふん、黙つて聞いてたら、女殺しのやうなことを云ひ出すわね。これぢや、あたしだつて死にたくなるわよ。」

お柳は立ち上ると部屋の中から出ようとした。参木はまたお柳の手を持つた。

「おい、何んとかしてくれ。このまま行かれちや、俺は今夜は危いんだ。」

「いいよ、あんたなんか死んだつて、くたばつたつて。」

「俺が死んだら、だいいちお前さんが困るぢやないか。」

「さアさア、馬鹿なことを言はないで、放してよ。今夜はあたしだつて、死にたいのよ。」

お柳は参木の手を振り切つて出ていつた。彼は此の馬鹿げた形の狂ひを感じると、お柳に対する怒がますます輪をかけて嵩じて来た。彼は寝台の上へ倒れたまま、心をなだめるやうに、毛布の柔かな毛なみをそろりそろりと撫でみた。すると、またドアが開いた。と、またお杉が突き飛ばされて転んで来た。お杉は倒れたまま顔も上げずに泣き始めた。参木は彼女の傍へ近よることが出来なかつた。彼はただ寝台の上から、お杉の倒れた背中のひくひく微動するのを眺めてゐた。彼は生毛の生えてゐるお杉の首もとから、黒い金魚のやうなまめかしさを感じて来た。彼はちかぢかとお杉の首を見ようとして降りていつた。しかし、

ふと彼は、お柳がどこからか覗いてゐるのを嗅ぎつけると、また首をひつ込めた。

「おい、お杉さん。こつちへ来なさい。」

彼はお杉の傍へ近よると彼女を抱きかかへて寝台の上へ連れて来た。お杉はすくみながら寝台の上へ乗せられても、まだ背中を参木に向けたまま泣き続けた。

「おい、おい、泣くな。」と参木は云ふと、ひとり仰向きに寝ころんで、楽しむやうにお杉の顔を眺め始めた。

お杉は一寸参木の片手が肩へ触れると、「いやだいやだ。」と云ふやうに身体を振つた。が、彼女は寝台から降りようともせず、袂を顔にあてて泣き続けた。参木はお杉の片腕を撫でながら、

「さア、俺の話を聞くんだけ。良いか、昔、昔、ある所に、王様とお姫さまがありました。」

すると、お杉は急に激しく泣き出した。参木は起ち上ると眉を顰めたまま、寝台から足をぶらぶらさせて黙つてゐた。彼は天井に停つてゐる燭風機の羽根を眺めながら、どうして好きな女には、指一本触れることが出来ないのかと考へた。これには何か、原理がある。——暫く彼は小首をかしながら、しやくり上げるお杉の泣き声を聞いてゐたが、

「さて、俺の帽子はどこいつた？」と見廻すと、そのまま部屋の外へ出ていつた。

甲谷は突堤へ行つたが参木の姿は見えなかつた。ただ掃除夫のうす汚れた赤い法被が、霧の中でこそそこそこ動いてゐるだけだつた。しかし、なほよく見ると、菩提樹の下に真暗なベンチの上で、印度人の髯が幾つも鳥の巢のやうにかたまつて煉んでゐた。彼は芝生の先端を歩いてみた。二つの河の流れの打ち合ふ波のうへで、大理石を積んだ小舟がゆるゆると波にもまれて廻つてゐた。甲谷は、チューリップが円陣をつくつて咲いてゐる芝生の中まで歩いて来た。すると、突然、彼は自分の美しい容貌の変化を思ひ出した。彼は直ぐ引き返すと、車を呼び寄せて宮子のゐる踊場の方へ走らせた。

——もし宮子が結婚しないと云へば、いや、何に、そのときはそのとき。——

踊場の周囲には建物もたれ合つて建つてゐた。蔦がその建物の割れ目から這ひながら、窓の上まで蔽つてゐた。踊場では、ダンスガールのきりきり廻つた袖の中から、アジア主義者の建築師、山口が甲谷を見つけて笑ひ出した。山口は甲谷がシンガポールへ行く前の遊び仲間の一人であつた。甲谷は山口と向ひ合つて坐ると云つた。

「実に久し振だね。此の頃は君どうだ。いつ見ても楽しさうな顔をしてゐるのは、君の顔だよ。」

「それが、見た通りの醜態だがね。ああ、さうだ。参木に此

の間逢つたら、君は嫁探しに來たつて云つたが、ほんたうかい。」山口は溢れるやうな微笑を湛へて甲谷を見上げた。「うむ、嫁もついでに探していかうと思つちやゐるんだが、いいのがあるかね。あつたら一つ頼みたいね。もつとも、君のセコンドハンドぢや御免だぜ。」甲谷はにやにや笑ひながらホールの中を見廻した。

「いや、ところが、それになかなか話せる奴がゐるんだよ。オルガといふロシア人だが、どうだひとつ。参木の奴にどうかと思つたのだが、あ奴はああ云ふドン・キホーテで面白くないし、どうだ君は。——意志はないか。」と山口は真面目な顔で相談した。

「ぢや君にはもう意志はなくなつてゐるんだな。そのオルガといふのは？」

「いや、それやある、しかし、ああ云ふ女は他人のものにしろく方が、どうも面白味が多さうなんだよ。」

甲谷は山口の言葉を聞き流しながら、這入つて來るときから探しつづけてゐる宮子の姿をまた捜した。だが、宮子の姿はいつまでたつても見えなかつた。

「しかし、僕の細君にして、それからまだ君が面目をほどこさうと云ふんぢや、それや、あんまり面白すぎるぢやないか。」

「いいぢやないか、細君なんかにしなけれや。倦きればまたそのときはそのときさ。まア、今はトゥエンティ見当の月給で結構だよ。」

山口は脇^{わき}をつきながら、甲谷のうろろうしつづける視線の方を自分も追つた。外人達がぼつりぼつりとホールの中へ這入つて来た。

「ときに話は違ふが、古屋の奴はどうしてゐる。」と甲谷は訊ねた。

「ああ、古屋か、あの男は芸者の細君を月賦で買つては變へてるよ。」

「まだこちらにゐるのかね。」

「うむ、ゐる。前の細君だつてまだ全額払込にはなつてゐないんだのに、また次のが、これが月賦だ。」

「御橋はどうした。」

「御橋も達者だ。しかし、先生、どうもあんまり妾^{めかけ}を大切にするのでつき合ひ難いよ。あ奴も參木^{まき}のやうな馬鹿者だね。」

しかし、甲谷は山口の話を聞かうとせず、うつろな眼で宮子はどうした、宮子はどうした、と絶えず思ひながらまた訊ねつづけていくのであつた。

「ふむ、木村はどうした。」

「木村には先日一度逢^あつたかな。奴さん、相変らず競馬狂でね、いつだかロシア人の妾を六人大競馬に連れてつて、負け出したのさ。ところが、あの男は振つてる。負けたらその場で妾を一人づつ売り飛ばすぢやないか。それですっかり負けちゃつてね、その日に六人とも売つちやつて、まだお負けに上着からチョツチまで質に叩き込んで、さアて

とか何んとか云つて澄してゐるんだが、先生が妾を持つのは、まアあれは貯金をしてゐるやうなものなんだよ。俺もお蔭でだいぶ迷惑をさせられたが、オルガといふ女も、つまり、木村から処分されて来たもんさ。」

しかし、甲谷は別段面白くもなささうに、「君はこのごろどうしてゐるんだ。」としはらくたつてまた訊ねた。

「俺か、俺は此の頃は建築屋はそつちのけで、死人拾ひと云ふ奴をやつてゐる。此奴は骨の折れる商売だが、なかなか文化に有益な商売でね。一度俺と一緒に来ないか。面白い所を見せてやるよ。」

「それや、どう云ふことをするんだね。つまり死人の売買か。」と甲谷は訊ねた。

「いや、そんな野蛮なもんぢやないよ。中国人から死体を買ひ取つて掃除をしてやるんだが、一人の死人で、生きてるロシア人の女を七人持てる、七人。それもロシアの貴族だぞ。」

どうだと云ふやうに山口の唇は歪^{ゆが}んでゐた。此の豪傑ならそれは平氣なことにちがひない、と甲谷は思つて踊りを見た。これはまた、うどんを捏ねてゐるやうな踊りの隙から、樂手達の自棄^{やけ}糞なトランペットが振り廻されて光つてゐた。すると突然、山口は踊りの中の一人の典雅な中国婦人を見つけて嘯^{なげ}いた。

「あッ、あれは芳秋蘭だ。」

「芳秋蘭つて、それや何んだ。」と甲谷は初めて大きな眼

を光らせると山口の方へ首をよせた。

「あの女は共産党では、たいへんだ。君の兄貴の高重君はあの女を知つてゐるよ。」

甲谷が振り返つて芳秋蘭を見ようとすると、そこへ、ほつそりと肉の緊つた、智的な眼の二重に光る宮子が、二階から降りて来て甲谷の傍の椅子へ来た。

「今晚は、お静かだわね。」

「うむ、いま細君の話をしているとところだよ。」と甲谷は云つて手を出した。

「まア、さう、ぢや、あたしあちらへ逃げてませう。」

宮子は身を翻すやうに、ひらりと盆栽の棕櫚を廻つていくと、甲谷はまた山口の方へ向き返つた。

「それで、さつきの死人の話だが、何んだか少し込み入つた話ぢやないか。」

「死人か。まアまア、それより一踊りして来なさい。死人のことは後でもいいさ。」

「それぢや、一寸失敬。」

甲谷は宮子に追ひついて二人で組むと、踊りの群れの中へ流れていった。宮子は甲谷の肩に口をあてて囁いた。

「今夜の足は重いわね。あたしはその人の重さで、何を考へてるのかつて云ふことが、まアだいたい分るのよ。」

「ぢや、僕は？」と甲谷は訊ねた。

「あなたは、奥様が見つかりさうよ。」

「左様。」

実は、甲谷は一人の死人と七人の妾について考へたのだ。

——何んと奇怪な生活法ではないか。廢物利用の極意である。甲谷はその話を聞くまでは、激しく宮子と結婚したい希望をもつてゐた。だが、七人の女と一人の死人の価値とを聞いてからは、妻帯者の不幸ばかりが浮んで来てならぬのであつた。踊りがすむと甲谷は山口の傍へ戻つて来た。

「君、さつきの死人の話をもう少し聞かしてくれよ。」

「まア、さう急がなくなつたつて、死人はいつでもぢつとしてゐるよ。」

「ところが、貧乏だつて、ぢつとしてゐるさ。」と甲谷は云つてまた宮子の方をちらりと見た。

「だつて、君は貧乏してゐるやうには見えんぢやないか。」

「いや、それや、僕も僕だが、それより参木の奴のことなんだよ。あ奴をもう少し何んとかしてやらないと、死んで了ふ。」

「死ぬつて、参木の奴が？」と山口は顎を突き出した。

「うむ、あ奴は近頃、死ぬことばかり考へてをるのだ。」

「ぢや、俺に金儲けをさせてくれるやうなもんぢやないか。」

甲谷は足をばつと両方へ掀げると、身を揺り動かして大きな声で笑ひ出した。

「さうだ、あの男は、今に君に金儲け位はさすだらう。」

「それや、面白い。よし、そんならひとつ、参木を俺の会社の社長にしてやらう。」

甲谷は山口の豪傑笑ひの中から、参木に対するいくらかの友情を嗅ぎつけると喜び勇んで乗り出した。

「君の会社は何んと云ふんだ。」

「いや、名前はまだだが、ひとつ、君から参木の奴に話してみてくれ。あ奴が死人になりたいなんて、それや、もつて来いの商売だよ。」

「それで、その死人をどうする会社だ。」

「つまり、人間の骨をそのままの形で保存しとかうつて云ふんだ。これを輸出すると一人前が二百円になつて来る。」

甲谷は二百円もする会社の材木の太さを考へながら、
「しかし、そんなに人間の骨が売れるのか。」と小声で訊ねた。

「君、医者に売るんだよ。医者ならそこは彼らの手先でどこへでも自由が効くのだ。もともと僕だつて、学術用に英国人の医者から頼まれたのが初まりなんだ。」

甲谷は参木が人間製造会社の支配人に納まつてゐる所を想像した。すると、やがて、彼らしい幸福が、骸骨の踊りの中から舞ひ上つて来るのではないかと思はれた。

「それで踊りを見てゐて、よく骸骨に見えないもんだね。」と甲谷は眉を吊り上げて笑つた。

「それが此の頃困るんだ。俺の家の地下室は骸骨でいっぱいさ。生きてる人間を見てゐても一番先に肋骨が見えてくる。とにかく君、人間と云ふ奴は誰でも障子みたいに骨があるんだと思ふと、をかしくなるもんだよ。」

笑ひながらアブサンを飲む大きな山口の唇が開きかかると、再びダンスが始まり出した。甲谷は立ち上つて彼に云つた。

「君、ひとつ踊つて来るからね、そこから骸骨の踊りでも見てゐてくれ。」

甲谷はまた宮子と組んで、モールの下で揺れ始めた男女の背中の中へ流れ込んだ。甲谷は宮子の冷たい耳元で囁いた。

「君、今夜は宜しく頼んでおきます。」

「何に？」

「いや、何んでもないさ。いたつて当り前のことだよ。」

「いやよ。風儀が悪いぢやないの。」

「だつて、結婚しなけりやなほ風儀が悪くなるさ。」

「もう、お饒舌しちや、塵埃を吸ふわよ。」

しかし、甲谷は山口の眼がうす笑ひを浮べて光つてゐるのを見る度に、いづれどちらも骸骨だと気がつくやうに、激しく宮子の背中を人の背中で廻し始めるのであつた。そのとき、宮子は山口がしたやうに、急に甲谷の耳もとで小声で云つた。

「あなた、ちよつと、あそこに芳秋蘭が来てゐるわ。」

甲谷は山口に云はれたまま忘れてゐた女のことを思ひ出して振り返つた。だが芳秋蘭の姿はもう廻る人の輪の中に流れ込んで見えなかつた。

「君、その芳秋蘭といふ女の方へ、僕をひっぱつていつて